

「お前も深海魚と同じ
だ」閉館後の水族館で
海洋生物学者に標本に
されたカントボーイ飼
育員が四回中出して壊
れる話

閉館後の深海水槽メンテナンス通路。ポンプの低い唸りだけが響く暗がり、湊の荒い呼吸が混じる。

「せ、瀬尾さ——」

「動くな」

背後から伸びた腕に腰を掴まれ、制服のジッパーが引き下ろされる。手首を片方にまとめて頭上に持っていかれた。

潜水で鍛えた手。長い指。抗えるわけがない。

「やめてくださ——っ」

「3ヶ月。お前が毎晩この通路で太腿擦り合わせてるの、全部見てた」

心臓が止まる。

カントの存在は、誰にも言っていない。

「深海魚と同じだ、お前は。暗いところでしか見せない顔がある」

瀬尾の声が水底から響くみたいに低く耳朶を打つ。制服のシャツを肩から滑り落とされ、Tシャツの裾をめくり上げられ、ベルトの金具がかちやりと鳴る。一枚ずつ、丁寧に。水槽の生き物を扱うときと同じ手つき——正確で、逃がさない。

「ひっ……♡」

下着だけの身体がアクリルパネルに押しつけられる。冷たさに鳥肌が立った。背後の水槽では深海魚が無関心に泳いでいる。

(見られてる——魚に、見られて——)

瀬尾の長い指が下着の上からカントの位置を辿る。布越しに触れたただけなのに、じわ、と湿っているのが分かった。

「もう濡れてる。やっぱり深海型だな。暗くて冷たい場所で発情する」

「ち、が……っ♡♡ そんなの、ちがいま——」

「嘘つくな。布、こんなに湿ってるのに」

くい、と下着が引き下ろされた。

冷たい空気がカントに触れた瞬間、反射的に両手で股間を隠そうとする。でも手首は瀬尾の左手に束ねられたまま。

「見ないで……っ♡♡ お願いだから、そこ——」

「見る。お前の生態を記録する」

瀬尾がしゃがみ込む。アクリルパネルの青い光に照らされたカントを、標本を前にした目で観察した。

「綺麗なピンクだ。未使用。処女膜も残ってる」

「やだぁ……っ♡♡ そんな風に言わないで……っ♡♡」

「事実を述べてるだけだ」

(やだ……っ♡♡ そんなの調べないで……♡♡なのに……見られてるだけでお腹の奥がきゅって……♡♡)

長い指が一本、割れ目をゆっくり辿る。表面にじわりと滲んだ蜜を指先に絡め取り、親指と人差し指の間で引き伸ばした。透明な糸が、青い光の中できらりと光る。

「粘度が高い。発情期の分泌液に近いな」

「お前、俺を見るたびにこうなってたのか？」

図星を突かれて腰が跳ねる。瀬尾はその反応をデータのよう
に淡々と記録して、指を滑らせ続けた。クリトリスの包皮
を剥いて、小さな突起を指の腹で——

「ひあっ♡♡ そ、そこ触らな——ッ♡♡」

「ここが神経の集中点だ。刺激すれば必ず反応する」

くり、くり、と正確な圧で転がされる。深海生物の標本を
扱う精度で、いちばん敏感な場所を暴いていく。

「んっ♡ ぐっ♡♡ やだっ♡ そこっ♡ 変にな——ッ♡♡」

「変になんかならない。正常な反応だ」

（やだっ♡♡ なんでこんなに気持ちいいの♡♡ 指先がちょっ
と触れてるだけなのに♡♡ 脚がっ……震えてる……♡♡）

ぴちゃ、と水音が鳴る。瀬尾の指がカントの入口に触れ、
浅く円を描いた。蜜がとろりと指を濡らし、太腿を伝い、コ
ンクリートの床に糸を引いて垂れる。

「中指を入れる。力を抜け」

ずぶ、と第一関節が沈む。

「ッ……♡♡♡」

声を殺そうと唇を噛む。でも瀬尾はそれすら許さない。

「噛むな。声を出せ。深海では音は伝わらない。ここは深海
と同じだ——誰にも聞こえない」

第二関節まで入る。内壁のひだを一つずつ確かめるように、関節をくい、と曲げて掻き上げた。

「んう……っ♡♡ せ、瀬尾さっ……♡♡」

膝が震える。

（なに、これ……♡♡ 指一本で、こんな……っ♡♡）

男の身体なのに。カントがある、だけの、男の身体なのに。

こんなところを触られて膝が崩れるほど気持ちいいなんて、知らなかった。知りたくなかった。

「二本目、入れるぞ」

ずちゅ、と粘った音。きつい処女のカントが指を締め上げて、瀬尾がわずかに息を吐く。

「すごい締まりだ。指二本で限界か。——時間をかけて広げる」

「やだっ♡♡ ひろげないでえ♡♡ ぼ、僕っ♡♡ おとこなのになっ♡♡ こんなところっ——」

「男だから何だ。カントがあるのはお前の生態だ。恥じることじゃない」

（……恥じることじゃないって♡♡ そんなの♡♡ この人だけだ♡♡ そんな風に言うの♡♡）

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅ——

指が出入りするたびに卑猥な水音が通路に反響する。ポンプの低い唸りに混じって、湊自身のカントの音が聞こえた。

「やだぁ……っ♡♡ そんな音……っ♡♡ 恥ずかし——っ♡♡♡」

「お前の身体が出してる音だ。俺のせいじゃない」
(ちがう♡♡ 瀬尾さんが掻き回すから♡♡ こんな♡♡ こんな♡♡——)

三本目の指が加わった。

「ひぁあっ♡♡♡」

悲鳴に近い声が漏れる。瀬尾は止まらない。奥のざらついたスポットを見つけて、そこだけを集中的に擦りにかかった。

「ここか」

ずり、と指先が押し上げる。

「あっ——♡♡♡♡」

びくん、と全身が痙攣する。腰が浮いて、膝が砕けて、アクリルパネルだけが身体を支えていた。

「ひう……っ♡♡ な、なにこれ……っ♡♡♡」

カントが三本の指をぎゅうぎゅうと締め上げ、透明な液体が瀬尾の手首まで垂れ落ちる。

(い——いった……？♡♡ いま、ぼく……♡♡ 瀬尾さんの指で……っ♡♡♡)

人生で初めての絶頂が、研究者の指の上で起きた。

瀬尾が濡れた指を引き抜いて、湊の唇に押し当てる。

「自分の味、覚えておけ」

「ん……っ♡♡ ん……っ♡♡♡」

甘くて、しょっぱくて、生臭い。これが自分のカントの味。
(おとこのくせに♡♡ こんな味のする場所がついてるなんて♡♡♡)

涙がぼろぼろ溢れた。

瀬尾が立ち上がる。潜水スーツの下半分を脱ぎ始めた。鍛えられた腹筋の下に——硬く勃った性器。

湊は目を見開く。太さも長さも、さっきの指とは比較にならない。

「む、無理ですっ……♡♡ そんなの入らな——」

「入る。お前のカントは深海魚の口と同じだ。自分より大きなものを飲み込むようにできてる」

機材置き場の作業台に座らされた。脚を開かされる。水槽の青い光が、さっき絶頂したばかりの濡れたカントを照らしていた。

「は……♡♡ やだぁ……♡♡ 光で……全部見えて……♡♡」

「全部見える方がいい。データの精度が上がる」

先端が入口に押し当てられる。蜜でぬるぬると滑って、カントの縁がひくひく痙攣した。

「こわい……っ♡♡ でも……っ♡♡」

(怖いのに——腰が逃げない♡♡ なんて♡♡ なんて僕の身体、受け入れようとしてるの♡♡♡)

「力を抜け。——息を吐いて」

息を吐いた、その瞬間——

ずぶ、と先端が割り込む。処女膜が裂ける鈍い抵抗。中を引き裂かれるような痛みに、声にならない声が喉から搾り出された。

「は……っ、いた……い……っ♡♡♡」

「もう半分入った。あと半分」

ずぶ、ずぶ、ずぶ——

ゆっくり沈んでいく。カントの内壁が異物を押し返そうと蠢くのに、瀬尾は止まらない。奥まで到達したとき、湊の目から涙がこぼれていた。

（おなかの……奥まで……♡♡ 誰かが、中にいる……♡♡）

身体の中に他人がいる。その圧倒的な存在感に思考が真っ白になる。

「動くぞ」

最初はゆっくり、浅く。内壁が馴染むのを待つ動き。

ぬちゃ、ぬちゅ、と音が変わる。痛みが引いて——代わりに腰の奥から、じわりと、熱。

「あ……っ♡ あ♡ ん……っ♡♡ なに……これ……♡♡」

「快感だ。お前のカントが俺の形を覚え始めてる」

（うそ……♡♡ 男なのに……♡♡ カントで……こんなに気持ちいいなんて……っ♡♡♡）

認めたくない。認めたくないのに、腰が勝手に揺れる。

ストロークが深くなった。奥を突かれるたびに腹がびくんと跳ねて、瀬尾が湊の片脚を肩に担ぎ上げる。

「ひあっ♡♡♡ そこっ♡♡ そこだめっ♡♡ 奥——ッ♡♡♡」

子宮口を突き上げられる。声が裏返って、視界がちかちか明滅した。

（おなかの中、ぐちゃぐちゃにされてる♡♡ 瀬尾さんのかたち♡♡ 僕のカントが作り替えられてく♡♡♡）

ペースは一定のリズムを保っていた。正確な律動が快楽を積み上げ続ける。逃げ場がない。計算された腰の動きに、湊の理性がみしみしと軋む。

ずちゅ♡ ずちゅ♡ ずちゅ♡ ずちゅ♡——

「瀬尾、さ……っ♡♡ もう、だめ♡♡ また……くる——♡♡♡」

「いけ。中で出せ。データを取る」

びくん、と全身が弓なりに反る。二度目の絶頂。カントが痙攣して瀬尾の性器を絞り上げた。その収縮に合わせて奥まで押し込まれて——射精。

どく、どく、と精液が子宮口を叩く感覚。

「おお……っ♡♡♡ なかつ♡♡ あつい……っ♡♡♡」

（精液……♡♡ 僕の中に……♡♡ 瀬尾さんの……♡♡♡）